肺がんの低線量 CT スクリーニングで過剰診断

肺がんスクリーニングでその死亡率が減らせる可能性はあるが、侵攻性の腫瘍を検出するのに加え、臨床症状を呈しない遅発性の腫瘍をも検出する。このような過剰診断により、がん治療に関連する費用や不安、死亡率が増すことにつながり、スクリーニングの害となり得る。そこで、肺がんスクリーニングの過剰診断について評価した。
肺がんの高リスク患者 53,452 人を対象に、低線量 CT または胸部 X 線を用いてスクリーニングを行い、6.4 年追跡し両群の肺がん発症について比較した。
その結果、追跡期間中に肺がん発症となったのは低線量 CT 群では 1,089 人、胸部 X 線群では 969 人であった。低線量 CT による過剰診断の確率は、低線量 CT で検出した全肺がんの 18.5%、非小細胞肺がんの 22.5%、気管支肺胞がんの 78.9%と算出された。
低線量 CT で検出された肺がんの 18%以上が遅発性であったことから、肺がんの低線量 CT スクリーニングによるリスクの観点からいえば、過剰診断と考えられる。
出典 : Journal of American Medical Association. Internal Medicine; Published online Dec 09, 2013. doi: 10.1001/jamainternmed.2013.12738